ネパール・ヒマラヤ
探査隊計画書

1959

福岡大学ヒマラヤ委員会

目　　次

第1章　経　過 1

第2章　計　画 3

附　図

1. NEPAL

2 Gyachung Kang & Gaurisankar

第一章　経過

登山家のメッカ、それはいうまでもなく、ヒマラヤである。1950年、モーリス・エルゾーグを隊長とするフランス隊は、ついにアンナプルナ Annapurna(8,078m)の頂を踏んだ。これが、8,000mを越える地点での人類最初の足跡である。その後、世界の最高峰エベレスト Everest(8,840m)をはじめ、ヒマラヤ及びカラコルムの8000m級の山々は、ほとんど登頂せられるにいたった。しかしながら、それらにつぐ7000m級の山々は千古の氷雪にとざされたまま、いまだ神秘をぬいではいないのである。

ところで、わが國ヒマラヤ登山の歴史を振り返ってみると、戦前に於ては、1936年立教大学遠征隊によるナンダ・コット Nanda Kot(6,867)登頂のほかには、見るべきものがない。勿論いろいろと計画はあったが、諸般の事情に制約せられてその実現を見るにいたらなかったまま、第二次大戦によってヒマラヤへの全ての希望は空しくうちくだかれてしまった。

しかし戦後になって、わが國の登山界が活気をとり戻すとともに、1950年頃からふたたびヒマラヤ遠征の計画が起りはじめ、その努力はついに日本山岳会による、マナスル Manaslu 登頂(8,125m・1956年)および京大学士山岳会によるチョゴリーサ Chogolisa 登頂(7,654m・1958年)において不滅の金字塔をうち立てたことは、すでに衆知の所である。そのほか、1952年―1958年の間に、京大のカラコルム・ヒンズークッシュ学術探険、スワート・ヒマラヤ探険、京大学士山岳会によるアンナプルナ第四峰 Annapurna IV(7522m)、深田隊によるジュガール・ヒマール Jugal Himal 踏査、日本山岳会によるガネシュ・ヒマール Ganesh Himal(7,406m)試登、およびヒマルチュリ Himalchuli(7,864m)偵察などが次々に実行されたのである。

各大学の山岳部もまた、すでに1930年頃から、その究極目標をヒマラヤに置いてその努力をつみかさねて来た。しかしヒマラヤは、その地理的位置とその高度および規模からいって、國内登山とは比較にならない程多額の費用と緻密な計画と高度の技術とを要求する。費用の点は別として、計画と技術についていうと、厳冬期の日本アルプスはまさにヒマラヤへの試金石である。してみると、今日わが國におけるヒマラヤ登山の盛況は、過去30年の間に蓄積せられた各大学山岳部諸先輩の研究と訓練と情熱とが、時を得て開花したものだといわなくてはならない。

わが福岡大学も勿論その例外ではない。福岡大学に改組せられてからはまだ日も浅いが，福岡商科大学さらにその前身たる福岡経済専門学校・福岡高等商業学校とさかのぼるならば，本学山岳部の歴史も相当に長いものになる。いな，歴史の長さだけではない。厳冬期における剣岳早月尾根或は東大谷，或は又鹿島槍北壁等に於ける実績は，本学山岳部の実力を雄弁に物語るものであろう。其れ故，ヒマラヤ遠征計画が芽ばえるだけの素地は十分にあったということになる。この様に，今回の〝福岡大学ヒマラヤ遠征計画〟は生れるべくして生れたものということがいえるのであるが，それが陽の目を見るまでにはすでに三年という期間が経過しているのである。

三年前，本学山岳部の現役が山岳部長渡辺教授にヒマラヤ計画を持ちかけた。渡辺部長は直ちにO.Bの加藤秀木氏にこれをはかった。加藤氏は，1950年福岡山の会がヒマラヤ遠征を計画し，すでに旅券の下附を受けながら，相手國の事情急変せるため入國査証が下りず，ついに遠征を中止した，その遠征隊の隊長であつた。氏はヒマラヤの事情にも相当明るいというだけでなく，その全情熱をヒマラヤに捧げているといつても良い位の登山家である。しかし，渡辺部長と加藤氏との相談の結果，もう少し時期を延ばして計画をねり直すと共に，部員の実力を一段と向上させるべく努力するのが賢明であろうということになり，加藤氏はそのまま山岳部コーチという形で部員の指導をつとめることになった。

そこで本学山岳部では，渡辺部長・加藤コーチを中心に，ヒマラヤに関する資料等を蒐集して細密な計画を立てると共に，四季を問わず日本アルプスでの訓練を重ねて来た。

ところが，幸い今年が本学創立25周年にあたるところから教授会有志，学友会，山岳部において，ヒマラヤ遠征を25周年記念事業の一つとして是非実行に移そうではないか，との声が次第に昂って来た。そして本年初頭の本学協議会の席上，これを大学の行事としてとり上げることが決定され，直ちに今村学長を長とする〝福岡大学ヒマラヤ委員会〟Fukuoka University Himalaya Committee が組織せられ，本計画は同委員会の手に委ねられたるわけである。

第二章　計　画

1. 登山隊の名称

福岡大学ヒマラヤ探査隊

2. 登山期間

昭和34年7月下旬　出國

昭和34年12月下旬　帰國

3. 登山目的と目的地

ヒマラヤ登山の一般的経験を得て、将来さらに大規模な登山隊を派遣できる可能性を強めるために、ネパール・ヒマラヤの次の山と地域を調査する。

(1) ガウリサンカール　Gaurisankar (7144m)

古来、有名な山であったが、現在まで1951年英國遠征隊（E.シプトン氏）、1955年仏・スイス遠征隊（R・ランベール氏）、1955年英國遠征隊（A・グレゴリー氏）、等が簡単な調査を行っただけである。そして今なお依然としてガウリサンカールをはじめ、多くの峰々（この中には、最高峰メンルン・ツエMenlung Tse. 7181mが含まれる）が未登頂のまま残っている。

私達はネパールの主都カトマンズKathmandu から約12日の行程にあるベエディングBedingを根拠地として、約1ヶ月間ガウリサンカールおよびその他の峰々の試登を行うものである。

この地域の調査が終了後、遠征隊はテシラプチャ峠Tesi Lapcha を経て、ナムチャ・バザールNamche Bazar に到り、ここを根拠地として、次の目標であるギャチュンカンを調査する。

(2) ギャチュンカン　Gyachuung Kang (7897m)

この山はエベレストの衛星峰として、その存在は早くから知られているが、現在までに1951年英國遠征隊（E.シプトン氏）、1953年英國遠征隊（J.ハント氏）、等が接近しただけで、登路は勿論、アプローチすら明らかにされていない。私達はこの山の登路を発見し試登を行う。

以上のように、私達の計画はガウリサンカールやギャンチュンカンに、いきなり登ろうとするものではない。これらの峰々は世界の登山家においても定評のある困難な場所である。

しかし、私達は前記の各國遠征隊の報告書や、その隊員であるR・ランベール氏、E・ヒラリー卿、C・エバンズ氏からの手紙によって、大体の見当がついているので、

有望な登路が発見出来るかも知れない。若しそうなれば、この探査隊の任務は完全に果されたということになって、私達は次に強力な遠征隊を派遣するよう努力する。

なお、この附近には探査隊の実力を持って充分に登り得ると思われる6～7000m級の峰が沢山ある。（それらは、既に登られたものもあるが、未登峰もかなり残っている。）

私達はガウリサンカール、ギャンチュンカン両峰の登路発見の必要上からも、多くの6～7000mに登るつもりである。

4. 旅　程

昭和34年	7月　下旬	日本出國（汽船）
	8月　下旬	カルカッタ着
	8月29日	カトマンズ着（パトナから空路）
	9月12日	ベエデイング着
	9月13日～10月10日	ガウリサンカール登山
	10月15日	ナムチャ・バザール着
	10月16日～11月15日	ギャチュンカン登山
	11月30日	ジャイナガール着
	12月　4日	カルカッタ着
	12月　下旬	日本帰國（汽船）

5. 隊　員　3名

本学関係者中より、後日　福岡大学ヒマラヤ委員会が決定する。

6. シェルパ3名　（ポーター40名）

ネパール外務省の斡旋により、ネパリーズ　シェルパを雇用する予定。なお、場合によっては、ダージリン・シェルパを雇用することもあり得るのでその費用として経費を計上する。

7. 装備、食糧等

全重量を1トン内外に制限するために、装備は出来るだけ軽装備とし、食糧もキャラバン中は調味料等を除てすべて現地食に依存する。種類別の重量は、次のとおりである

装　備　300Kg

食糧　600kg
其他　200kg
計　1100kg

8、費用

費用は本学25周年記念事業費、学友会費その他寄附等で、福岡大学ヒマラヤ委員会が調達する。

なお、探査隊派遣費およびその明細は次表のとおりである。

探査隊派遣費

区分	金額(円)	備考
外貨費	1,329,480	別記のとおり(3693ドル)
装備費	510,000	シェルパ装備の一部を含む
食糧費	150,000	BC以上の食糧、7人の2ケ月分
医療費	20,000	
写真費	50,000	主にフイルム代(器材は別途)
梱包費	20,000	梱包総数、約40個
雑費	10,000	土産品、事務用品
合計	2,089,480	

ヒマラヤ探査隊派遣予算

費目	金(円)額	内訳	ルピー	ドル
渡航費	382,800	一人片道船賃(貨客船) 180ドル		1,080
		三人往復、通関料往復、450ルピー	450 IR	
		○宿泊費、カルカッタ、一人一泊34ルピ(34R×3人×7日)	894 IR	
		カトマンズ〃 20ルピー(20R×3人×7日)		
		○輸送費 (隊)カルカッタ~パトナ往復90R(30R×3人)、パトナ~カトマンズ270R(90R×3人)、ジャイナガール~カルカッタ150R(50R×3人)		
		(荷)カルカッタ~パトナ~カトマンズ900R、ジャイナガール~カルカッタ100R	1510 IR	
		○登山料 1000R	1000 IR	

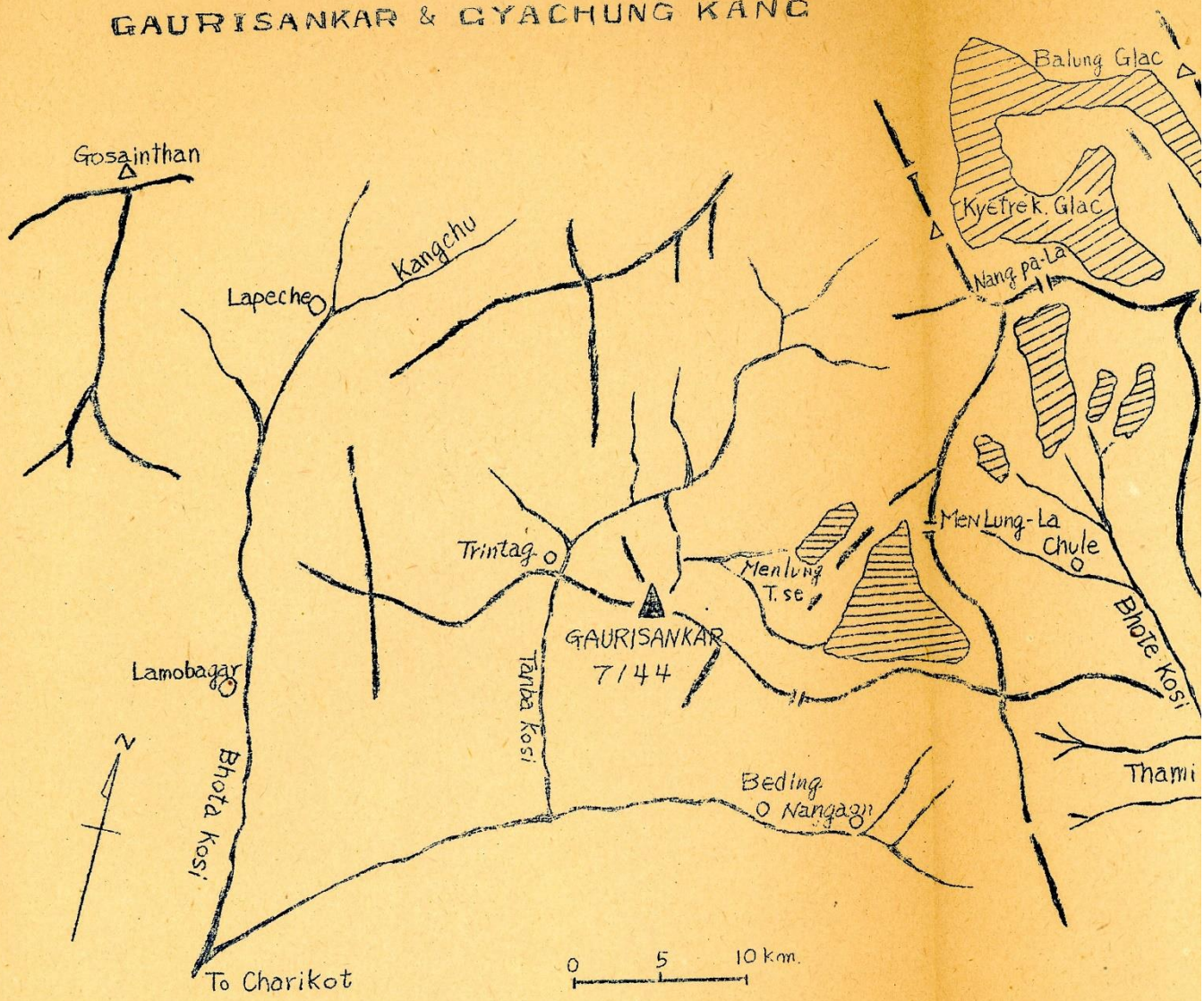
外貨費	949,200	○リエゾンオフィサー・給料 旅費630R 1ヶ月200R×3ヶ月旅費1日3R×10日 ○シエルパ費 2010R(7R×1人×90日) (6R×2人×90日)其他300R ○ポター費 1人1日5R(5R×40人×12日) (5R×5人×60日)(5R×5人×30日) (5R×5人×15日) ○キャラバン費、隊員1日3R(3R×3人×40日) 連絡官(3R×1人×40日) シエルパ1日2R(2R×3人×40日) ○現地食料費、隊員、連絡官、シエルパ1日2R (2R×7人×60日) ポター1R(1R×5人×60日)	630 I.R 2010 IR 5775 N.R 720 NR 1140 NR	2.620
装備費	851,365	隊員3人(個人負担を除く)リエゾンオフィサー支給品、シエルパ3名支給品		
食糧費	275801	主として7名分の高所用、高所ポーター5名分も含む(キャラバン中は現地調達)		
薬品費	65000	主として寄附見込み		
写真費	745000	アサヒペンタックス・キヤノン・ミノルタ白黒フイルム主として6/6カラースライド35ミリカラー8ミリフイルム50本		
器具費	80000	タイプライター・高度計		
梱包其他雑費	130000			
合計	3,479,166	IR 1インドルピー=¥75 NR. 1ネパールルピー=¥50 1$=IR 4.8 1$=NR. 7.2		

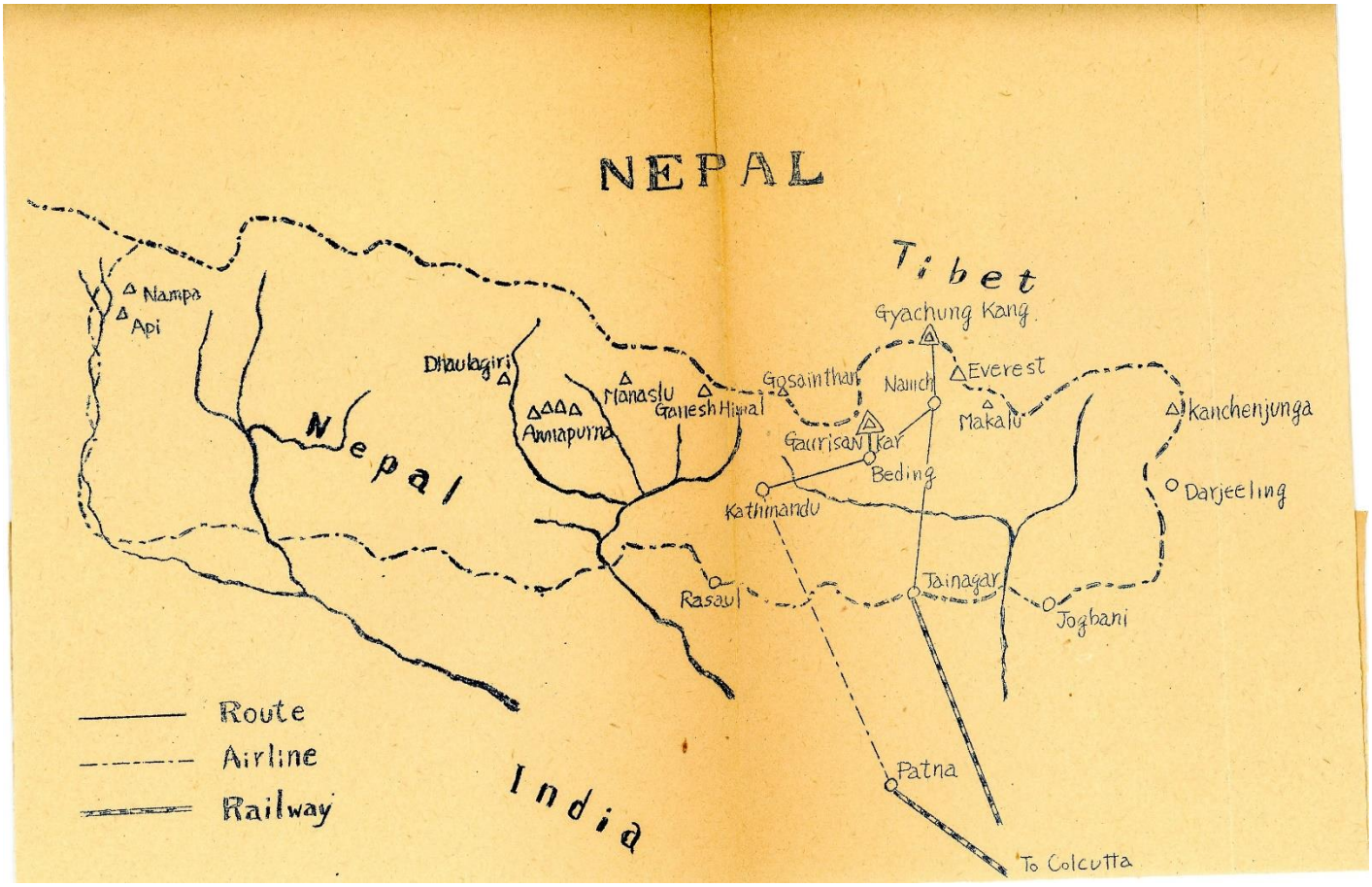
外 貨 使 用 明 細 表

費用	ドル($)	印度ルピー (I.R)	ネパールルピー (N.R)	内訳	備考
渡航費	1,280	450		日本カルカッタ往復 $1,080 $360×3人 荷物往復 $200 通関料往復 Rs 450	日本貨客船
宿泊費		894		カルカッタ往復 Rs 714 Rs 34×3人×7日 カトマンズ Rs 180 Rs 20×3人×3日	
隊員輸送費		510		カルカッタ～パトナ(往) Rs 90 Rs 30×3人 パトナ～カトマンズ(往) Rs 270 Rs 90×3人 ジャイナガル～カルカッタ(復) Rs 150 Rs 50×3人	鉄道(一等) 航空 鉄道(一等)
荷物輸送費		1,000		カルカッタ～パトナ～カトマンズ(往) Rs 900 ジャイナガール～カルカッタ(往) Rs 100	エージェント支払 カルカッタ～パトナ間 トラック. パトナ～カトマンズ間 航空 鉄道
登山料		1,000		ネパール登山規則による	
連絡官費		630		給料 Rs 600 Rs 200×3日 帰郷旅費 Rs 30 Rs 3×10日	
シェルパ費		2010		サーダー給料 Rs 630 Rs 7×90日 シェルパ給料 Rs 1080 Rs 6×2人×90日 給料以外の費用 Rs 300	
				カトマンズ～ベエディング Rs 2400 Rs 5×40人×12日	

ポーター費			5,775	ガ峰登山中 Rs 750 Rs 5×5人×30日 ベエデイング～ナムチャ Rs 750 Rs 5×5人×30日 ギ峰登山中 Rs 750 Rs 5×5人×30日 ナムチャ～ジャイナガール Rs 1,125 Rs 5×15人×15日	
キャラバン費			720	隊員 Rs 360 Rs 3×3人×40日 連絡官費 Rs 120 Rs 3×1人×40日 シェルパ Rs 240 Rs 2×3人×40日	カトマンズ～ベエデイング 12日 ベエデイング～ナムチャ 5日 ナムチャ～ジャイナガル 15日 予備 八日
現地食糧費			1,140	隊員 Rs 360 Rs 2×3人×60日 連絡官費 Rs 120 Rs 2×1人×60日 シェルパ Rs 360 Rs 2×3人×60日 ポーター Rs 300 Rs 1×5人×60日	登山中の食糧は内地から持参するが，現地で少し調達する費用
計	$. 1,280	I.R 6,494 ($1,353)	N.R 7,635 ($1,060)	$ 1＝¥360 IRs 1＝¥75 NRs 1＝¥50 $ 1＝I.Rs 4.8 $ 1＝NRs 7.2	
$換算合計	$ 3,693			(¥ 1,329,480)	

GAURISANKAR & GYACHUNG KANG




NEPAL
Tibet
Nampa
Api
Dhaulagiri
Manaslu
Ganesh Himal
Annapurna
Nepal
Gosainthan
Gyachung Kang
Everest
Namch
Makalu
Kanchenjunga
Gaurisankar
Beding
Darjeeling
Kathmandu
Rasaul
Jainagar
Jogbani
Patna
To Colcutta
India
Route
Airline
Railway

創立25周年記念

福岡大学ヒマラヤ探査隊趣意書

ネパール王國には世界の最高峰エベレストを始めとして、7000米以上の山々が70有余も聳なっております。ここは、地球の両極につぐ第3の極地として、私どもの心をいたくひきつけるものがあります。

人類はその持てる力の限りをつくして、この「神々の座」の神秘を究めようとしております。そして、人間がその足で8000米の高さに至ることが出来るようになったのは1950年以后のことでありますから、ヒマラヤ遠征というのはまさに20世紀的な意義を持つ企てであるといえましょう。

福岡においても戦后いち早くヒマラヤ遠征が計画されましたが、不幸にも中途で挫折して居ります。福岡大学では今のたび創立25周年を記念して、三人の遠征隊を派遣する計画を立てました。幸い文部省体育局の絶大なる御援助により渡航審査会において外貨使用の許可をうることが出来ました。多年にわたる研究に基づいて十分な準備をした上で、7月下旬の船便で出発する予定であります。

目的の山々　ネパールの首都カトマンズの東の方に、エベレストに至る有名なエベレスト・ルートがあります。この方面には日本の探険隊はこれまで一度も足をむけたことはありません。それゆえ、この地方を目差していることが本隊探査隊は、エベレスト・ルートよりさらに北方に路をとりベディングに至り、そこからガウリ・サンカール周辺の探査に向うことになります。次にヒマラヤの案内人シェルパの故郷ソラ・クンブの中心ナムチャ・バザールに転じ、そこからギャチュン・カンに向う予定であります。

ガウリサンカール（7144m）

古くからヒマラヤの代表的名山として知られた山ですが、名前の知られている割

に実態は調査されておりません。本隊はその北面に廻って登山路の発見につとめ、比較的容易な登路が発見できれば登頂を試みる予定です。また北方に接近してメンルン・ツエ（7181m）の峻峰がそびえております。

ギャチュンカン（7897m）

いまだ何びとによってもその実態はつかまれておりません。エベレストの衛星峰の一つで、かの有名なアモリの北にあり、「恐るべき山」と呼ばれております。この高峰を紹介する写真をもたらすだけでも、探査の価値は十分であろうと思われます。

日本発	昭和34年7月下旬
カルカッタ発	8月下旬
カトマンズ発	9月上旬
ベエデインク発	9月中旬
ヴウリウンカール山探査	1ヶ月
ベエデインク発	10月中旬
ナムチャ・バザール発	10月中旬
ギャチュンカン山探査	1ヶ月
ナムチャバザール発	11月中旬
カルカッタ発	12月上旬
日本帰着	12月下旬

隊員構成　三人の隊員を持って構成される、探査を目的とする小遠征隊であります。スケッチ・マップの作成・写真撮影等に努力し、適当な登路が発見出来れば相当の高度に達しうるものと期待されます。

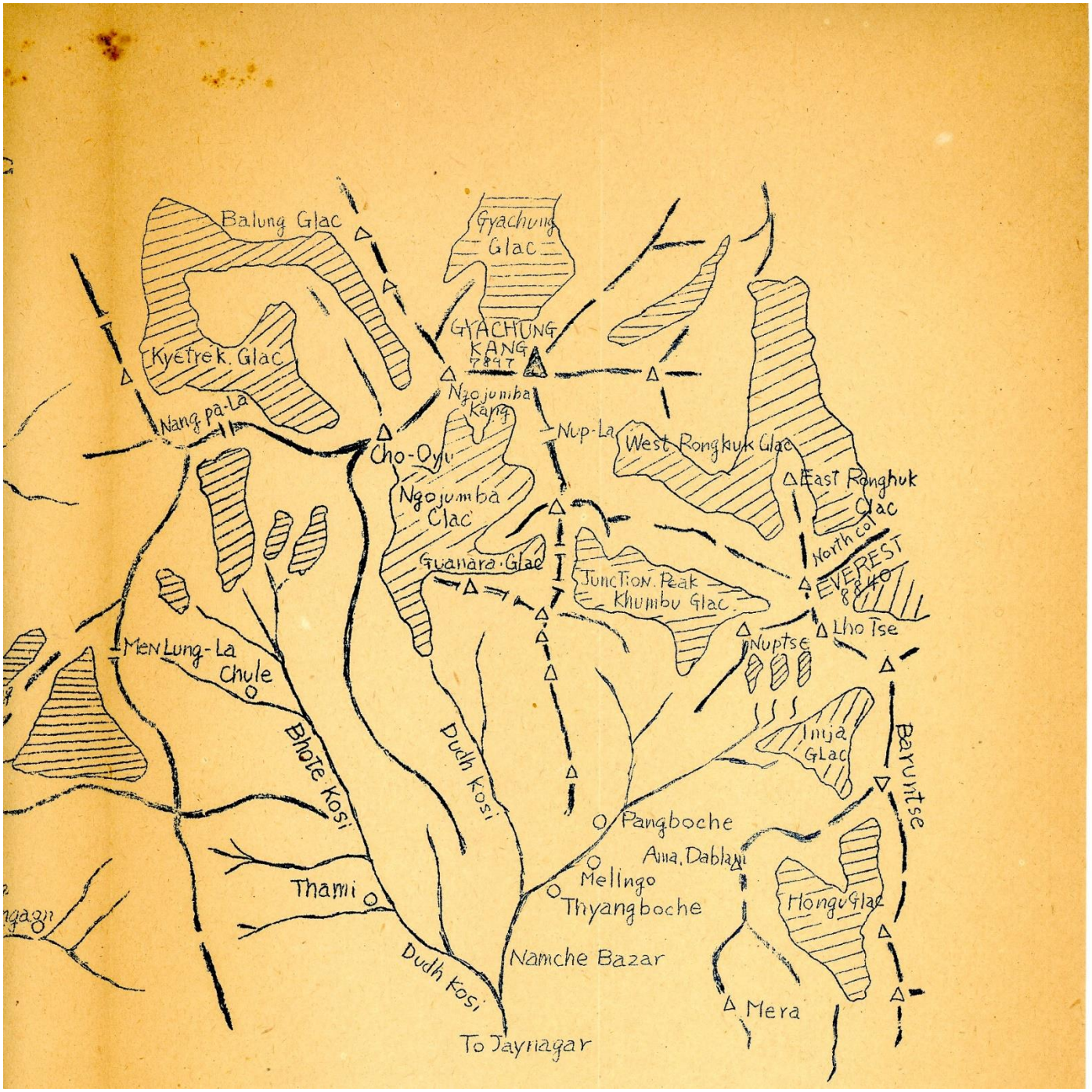
隊長 OB	加藤秀木	（38才）
隊員 OB	阿部盛明	（29才）
〃 〃 学生	尾石光治	（21才）

なを、カトマンズにてキャラバン（隊伍）を組織します。

リエゾン・オフィサー	（連絡官）	1名
シェルパ	（案内人）	3名
ポーター	（荷物運搬者）	約50名

将来の計画　探査の結果登頂の見込をうれば、昭和35年度にて人程度の本隊（政撃隊）を派遣する計画であります。

主催　福岡大学ヒマラヤ委員会


Balung Glac
Gyachung Glac
GYACHUNG KANG 7897
Kyetrek. Glac
Nang pa-La
Ngojumba Kang
Nup-La
West Rongbuk Glac
Cho-Oyu
East Rongbuk Glac
Ngojumba Glac
North col
Guanara Glac
Junction Peak
Khumbu Glac
EVEREST 8840
Lho Tse
Nuptse
Men Lung-La
Chule
Bhote Kosi
Dudh Kosi
Imja Glac
Barun tse
Pangboche
Ama. Dablam
Melingo
Thyangboche
Thami
Hongu Glac
Namche Bazar
Dudh Kosi
Mera
To Jayrnagar

福岡大学ヒマラヤ委員会

会長	学長	今村　有
委員	学生部長	河原由郎
	法学部長	平山一雄
	経済部長	梅田政勝
	商学部長	青木健一
	教養部長	井上安孝
	体育教官	樋崎正雄
	事務局長	鳥巣時雄
常任委員	山岳部長	渡辺幸生
委員	山岳副部長	今村　茂

福岡大学ヒマラヤ委員会
福岡市七隅新年田11
電話 ㊥9536番